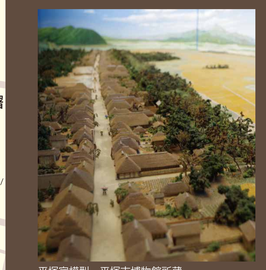
旧東海道　平塚宿


平塚宿模型　平塚市博物館所蔵

平塚宿は、東海道五十三次の一つの宿場として慶長6年（1601）に成立しました。宿場は、幕府の公用で旅をする役人や諸荷物を継立（人や荷物を継ぎ送ること）する場所で、旅人が休憩するための茶屋や宿泊するための旅籠などの施設も整っていました。神奈川県内には東海道の宿は9つ（川崎・神奈川・保土ヶ谷・戸塚・藤沢・平塚・大磯・小田原・箱根）ありましたが、そのうち、平塚宿は家数で8番目の規模の小さな宿場でした。また、旅行者が江戸や京都から東海道を通る場合、小田原や戸塚・保土ヶ谷などに宿泊し、平塚宿は休憩地として利用されることが多かったようです。

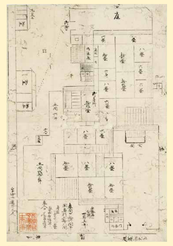
文久2年（1862）ごろの平塚宿には、東海道沿いに本陣1軒、脇本陣1軒、旅籠42軒、湯屋4軒、髪結床2軒を含む総計210軒の屋敷が建ち並んでいたといいます。また、東西に真っすぐ伸びる東海道に沿って町屋が続く、この直線的な宿場の景観は、県下東海道で特徴的な宿場景観の一つとなっています。

❶本陣　❷脇本陣

本陣とは宿場において参勤交代の大名や、公家、公用の幕府役人などが宿泊した大旅館です。脇本陣とは本陣の補助的役割を担い、本陣だけでは宿泊の需要に応じられない場合に使用される旅館です。本陣は一般旅行客の宿泊は厳しく制限されていましたが、脇本陣は公用の宿泊者がいなければ一般客の利用も許可されていました。

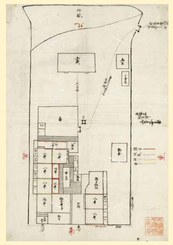
なお、本陣は1宿に1軒という原則があったわけではなく、天保14年（1843）の『宿村大概帳』によれば、保土ヶ谷宿、藤沢宿、平塚宿には1軒、川崎宿、神奈川宿、戸塚宿は2軒、大磯宿は3軒、小田原宿は4軒、箱根宿は6軒の本陣がありました。

平塚宿加藤本陣絵図


平塚市博物館所蔵

建坪111坪半の規模を持つ平塚宿本陣加藤七郎兵衛宅の絵図面。街道から向かって右側に表門とそれに続く表玄関があり、その奥、庭に面して上段の間があります。街道から向かって左側は、街道より後退した広場があり、表入口からは荷物置き場である広い土間と板の間が設けられてありました。

平塚宿山本脇本陣絵図


平塚市博物館所蔵

平塚宿脇本陣山本安兵衛宅の絵図面。街道から向かって左が御門入口と玄関、右が荷物置き場となる土間続きの表入口となります。脇本陣は、旅籠屋を兼ねており、その規模と造りなど本陣に及ばないまでも、通常の旅籠屋とは違う格式の構えでありました。

❸問屋場

問屋場は、江戸と全国各地の間で送付される幕府の書状や荷物の継立、参勤交代の大名行列時などに周辺の村々から動員された人足や馬の差配を取り仕切る場所で、宿場の運営上最も重要な施設であり、街道に面した宿場の中心に設置されている場合が多くありました。平塚宿では、問屋場が2カ所あり、西仲町にあったのを西組問屋場、二十四軒町にあったのを東組問屋場といいました。

❹高札場

高札場とは、幕府や領主の法令や通達を書き記した木の札（高札）を掲示した場所のことであり、通常、土台部分を石垣で固め、その上を柵で囲み、高札が掲げられる部分には屋根がついていたといいます。平塚宿の高札場は、長さ 約5m、横 約1.8m、高さ 約3mありました。

❺京方見附

日本カメラ博物館所蔵

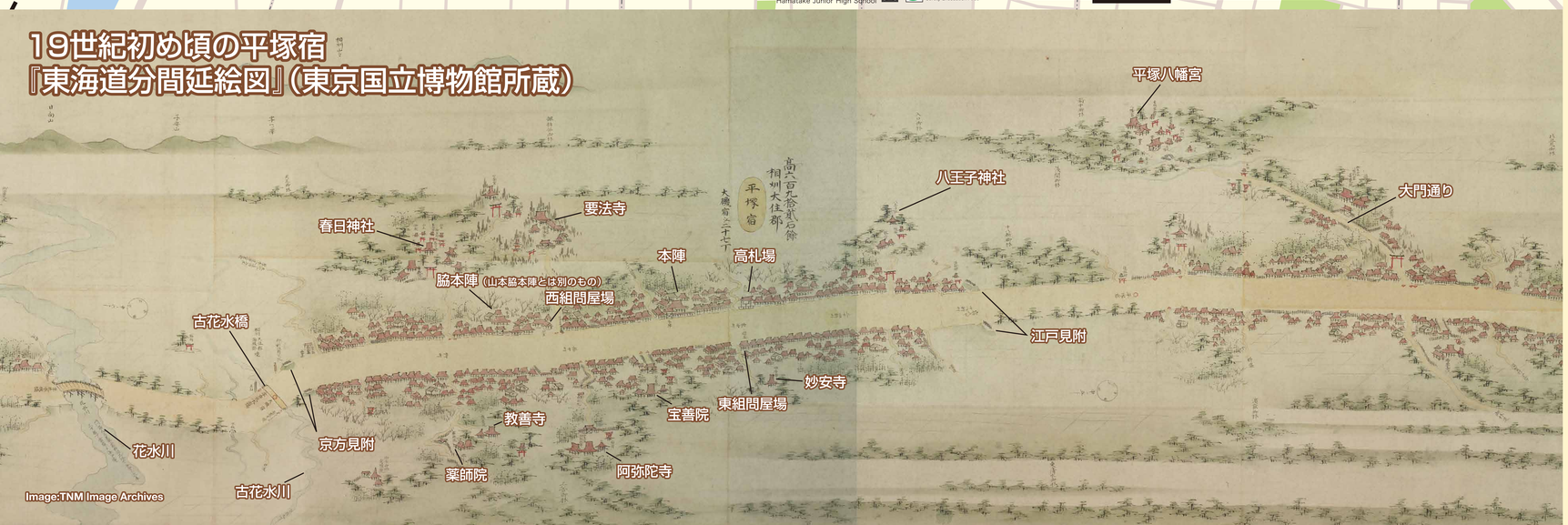
東海道をはじめとする主要な街道の宿場の出入り口には、見附と呼ばれる構造物が設置されていました。一般に見附は江戸側の出入り口にあるものを江戸見附、京側の出入り口にあるものを京方見附といいます。京方見附は、高麗寺村と平塚宿の境界になる柳町の西端にあったといわれています。左の写真は明治14年（1881）頃のものといわれております。

❻古花水橋

宝永4年（1707）11月、富士山が噴火し、降砂の堆積で花水川（金目川）は洪水が発生しやすくなりました。そこで幕府は宝永6年（1709）7月、砂の堆積を防ぐため、東海道付近で蛇行していた花水川の直線化工事を浜松藩に命じ、翌年3月に完工させました。もとの流路の一部は古花水川として残り、東海道には古花水橋が架けられていました。現在の花水川の流路はこの時にできたものですが、かつての流路は現在も平塚市と大磯町の境界になっています。

❼平塚の塚

平塚の地名の由来として有名なのが、「平塚の塚」の言い伝えです。これは東国に下向していた桓武天皇3代の孫、高見王の娘政子が天安元年（857）2月25日にこの地で没し、そのひつぎを埋めて塚を作ったところ、塚の上が平らであったことから「平塚」の地名が起こったとするものです。

この言い伝えは、天保期に幕府が編さんした『新編相模国風土記稿』にも収録されているものですが、「政子」なる人物の実在は確認できないことから、あくまでも伝説であると考えられます。

19世紀初め頃の平塚宿
『東海道分間延絵図』（東京国立博物館所蔵）